

事業2 5, 6年次_研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	O・H	サラワク大学	マレーシア	2023/4/3～2023/4/28
2	N・K	サラワク大学	マレーシア	2023/4/3～2023/4/28
3	N・T	サラワク大学	マレーシア	2023/4/3～2023/4/28

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号：*****	氏名：〇・〇
渡航先国：マレーシア			
受入機関名：サラワク大学			
渡航先機関での受入期間： 令和5年4月3日～令和5年4月28日 (26日間)			

(1)目的

現在、急激な勢いで成長中であり先進国となりつつあるマレーシアで過渡期の医療を学ぶ。また歴史、地理的に多民族国家であるマレーシアにおいていかにして医療がおこなわれているかを知り将来的にどの国でも起こりうる「多民族多言語医療」を先に見学しておく。

(2)実習の概要

主に Sarawak general hospital の病棟にて行われている医療を見学し、議論する。また提示された疾患についてその鑑別を考え治療法を議論する。

サラワク大学では Bed side teaching に参加し、現地の学生がどのようにして医療を学んでいるかを学習する。

(3)スケジュール

4月3日	オリエンテーション	4月16日	休日
4月4日	General medicine/lecture	4月17日	Neurology/lecture
4月5日	Lecture	4月18日	General medicine
4月6日	General medicine	4月19日	General medicine/外来見学
4月7日	Sarawak museum 見学	4月20日	General medicine/外来見学
4月8日	休日	4月21日	祝日
4月9日	休日	4月22日	休日
4月10日	BST/lecture	4月23日	休日
4月11日	Lecture	4月24日	Hari raya
4月12日	Lecture	4月25日	General medicine
4月13日	Lecture	4月26日	General medicine
4月14日	Lecture	4月27日	Lecture/まとめ
4月15日	休日	4月28日	別れの挨拶/帰国準備

(4)実習内容と興味深かった点

Sarawak general hospital

ここでは主に三つの形態の実習を経験した。まず一つ目は general medicine の病棟実習である。ここでは現地の医師について診察を見学、実施し現地の医療を経験することができた。私が非常に興味を持ったのはその言語である。マレーシアでは主にマレー語、英語、中国語が用いられるが一般的な現地の方はマレー語しか話せない方も多々いる。しかしながら日本と異なり医学教育は英語で行われる。したがって医師と患者の間の会話はマレー語、医師同士の会話は英語で行われるという我々からすると見慣れない光景を目にすることができた。疾患においてはもちろん、感染症—例えば類鼻疽など—が興味深くまた大きな問題であるのは事実であるが、私以外の方がすでに過去に大量に書かれていると思うためここでは

発展途上でもなく、完全な先進国ではない、過渡期に見られる疾患が非常に多かったことを報告したい。それは DM, すなわち糖尿病である。マレーシアサラワク州では貧困率は我々の見る限りでは低く、人々はかなりおおらかな暮らしを楽しんでいるように見えた。しかしながら糖尿病の恐怖、例えば失明や DKA などに対する医学啓蒙が十分に民衆に伝わるほど発達してはいない。加えてマレーシアでは非常に味の濃い料理が好まれる。以上の要因が重なり現地では大量の 2 型糖尿病患者がいた。医師によると DKA とソフトドリンク症候群を分けて考える必要がないレベルでありすべて DKA として対処しているとのことであった。

Lecture

これは総合診療医によって行われた。ここで私たちは多くのことを学んだ。講義は非常に幅広い分野からであったが、体系化されており英語で学んでいるとは思えないほどわかりやすかった。恥ずかしながら自分が医療について持っていた知識は断片化されたものであり相互にはつながっていなかったということが、この講義ではっきりと分かった。時折休憩がてらにマレーシアの医療制度のお話も聞くことができた。その中でも個人的に印象深かったのは、マレーシアの医師のキャリアと MRI, CT などの検査装置についてのお話である。マレーシアでは、医師は大学卒業後、日本と同様に初期研修医(あちらでは training doctor とそのまま表記されていた)を 2 年間務めるということまでは同じなのだが、そこから専門医に進むのではなく、一度総合診療医として数年間務めたのち、専門医教育課程に進むのだという。なぜこの違いが生まれるのかというと、マレーシアでは慢性的に医師が足りていないからである。一人の医師が数十人の患者を担当するということもまれではない。したがって専門医を増やしていく段階ではなく、働き盛りの年代はとりあえず総合診療医としてあらゆる疾患の対応に当たるということになっているのだという。二点目は高額な MRI, CT をすべての病院にまんべんなくそろえるということが非常に難しく、おそらく大阪大学病院に匹敵する規模の Sarawak general hospital でさえ、MRI, CT は一台しかなく、一日に数件しか検査ができないということであった。その一方で、富裕層向けの私立病院では多くの MRI, CT を備え付けているということであり、良くも悪くも福祉的な面での違いを感じた。

外来見学

他国の外来を見学するというのはその国の医療のさまざまなレベルを推察できるため、前々から非常に興味を持っていたのだが、今回現地の医師のご厚意で見学をさせていただくことができた。このレポートに自分のスケッチを載せることができないのは至極残念であるが、その概要を述べようと思う。まず強烈に印象に残ったことは、外来の待ち患者人数の多さである。外来対応室の間取りとしては大部屋が少なくとも 15 個、その大部屋に個室が 4~5 個あり、小部屋ごとに医師が 1 から 2 人体制であったというものであった。しかしながらそれでも全く足りておらず、廊下はおろか階段にまで患者があふれていた。医師は常に大量の書類を抱えてたのだが、聞くとそれはカルテ、紹介状の山であった。Sarawak general hospital にはコンピューターがほとんど普及しておらず医師が手作業で作業をし

ていた。患者が順番に呼ばれて、医師が診察を行うのであるが、やはりここでも主にマレー語が用いられていた。患者の医学啓蒙レベルは非常に大きな差があるということも印象的であった。というのは、ある患者は流暢に医学英語を理解し薬のアドヒアラנסも完全であるのだが、一方でマレー語のみ、それもサラワク訛りのマレー語のみしかわからず、ジャングルの奥地で代々受け継がれてきたシャーマン配合の薬(それは大抵の場合副作用をきたしていた)しか服用せず、一から体の仕組みを教えなければならない患者もいた。

Sarawak 大学

我々は主に医師についていたため、そこまで多くの Sarawak 大学の授業や実習に参加できたわけではないのだが、一部には参加し現地の学生のレベルや我々との違いを感じたためその内容を書く。主に座学と bed side teaching に参加した。

座学

我々は消化器の授業に参加した。当然ながら英語で行われていたが、個人的にはその授業形態により関心を持った。まず生徒がおよそ 30 分程度のプレゼンテーションを行い、担当の先生がその講評や補足を行うという前半パート、続く後半パートでは先生が授業を行う。英語を除けば日本のプレゼン型授業とそこまで大きな差は感じなかつたが、専門的な研究内容などがないところと、より疾患の鑑別に力を入れているという点が印象的であったとともに刺激になった。

Bed side teaching(BST)

この授業では決められた時間で生徒が患者を実際に診察し指導医に症例のプレゼンを行う。実践的という意味ではこれ以上ないくらいに実践的であると感じた。学生として非常に優れていると感じたのは、診察能力とプレゼン能力である。診察能力に関しては、限られた時間で効率的に、なおかつ重要な兆候を見流さないように診察するという訓練をしっかりと受けているように感じられた。またプレゼン能力に関してはテストがあるということもあり、各自準備を行いそのあと議論をするというプロセスを全うしていく非常にレベルが高いと感じた。

(5)今後の抱負と謝辞

通用した部分と通用しなかった部分が明確であったと感じた。まずは通用した部分であるがもともとの医学知識はある程度勉強していたため、日本語で何というかわかれ理解できて次のステージにつながるという経験を得ることができた。通用しなかった点で最も大きかったのはリスニング能力である。あらゆる場面において聞き取れず何度も聞き直してしまい非常に悔しかった。学生のうちに必ず改善したいと思う。最後に、今回このような素晴らしい海外実習を行うことができたのは、サラワクのドクター、先生方、教育センターの先生方、そして岸本奨学金を通じて多大なご支援を頂いた岸本忠三先生のご協力によるものです。心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号 : *****	氏名 : N・K
渡航先国 : マレーシア			
受入機関名 : University Malaysia Sarawak, Hospital UMUM Sarawak			
渡航先機関での受入期間 :			
令和 5年 4月 3日	～	令和 5年 4月 28日	(26日間)

[実習目的]

私がサラワク大学での臨床実習を申請した理由は2つありました。

1つ目は、マレーシアでの多民族で構成された医療について学ぶことです。マレーシアには、マレー系、中国系、インド系など、さまざまな民族が混在し、また宗教においてもイスラム教、キリスト教、シーカ教、ヒンドゥー教、仏教といった、さまざまな宗教が信仰されています。それぞれの宗教の厳しい規律や価値観が混在する中で、どのように医療が提供されているのかについて実際に病院実習に参加することでこの目でみてみたいと思いました。

2つ目は、熱帯気候ならではの疾患について学ぶことです。日本では、マラリアやデングウイルスなどの感染症においては講義で習うのみで実際に感染した患者を日本で見る機会はほとんどありません。今回のマレーシアでの実習を通して、そのような感染症により患者に生じる症状、そして患者に対する対応などを学びたいと思いました。

[実習内容]

診療科は1ヶ月間 General Medicine を選択しました。サラワク大学は病院を所有していないため、サラワク大学と提携している Hospital UMUM Sarawak に伺いました。General Medicine のスペシャリストに付いて一ヶ月間、先生方の診療を見学しました。1日の流れとしては、午前中はスペシャリストに付いて病棟を見学し、午後は外来を見学しました。

サラワク大学での医学部の講義にも自由に参加することができ、サラワク大学医学部3年の講義にも何度か参加させていただきました。

[成果]

病棟を見学して一番印象に残ったのは、糖尿病患者、肥満患者の数の多さでした。日本でも生活習慣病は大きな問題となっていますが、事態はマレーシアの方が深刻であるように思いました。私はこの生活習慣病が多い原因は主に3つあると思いました。

1つ目は食事の味の濃さです。実習期間中、General Medicine のスペシャリスト達やサラワク大学の医学生達が私達留学生をさまざまなレストランや屋台に連れて行ってくださいました。ナシゴレン、チキンライスなどのマレー系料理、羊肉麺や牡蠣フライなどの中華料理、カレーなどのインド系料理などさまざま食文化を経験することができました。どれも非常に美味しくまた食べたいと思うような料理ばかりでした。しかし、日本料理と比較した際に感じたのは、どの食事も味がはっきりしていて、少々濃いめであることでした。ある現地の人が「この料理は味が薄いから美味しい」といってほとんど口にしなかつたる料理を少々いただいた際、私はしっかりと味がついていると感じました。さらに、飲み物においては水、砂糖無しコーヒー以外の飲み物は全て甘く作られていました。緑茶でさえ甘く作られていることには驚きました。マレーシアの人は濃い味を好むのだと実感しました。

2つ目は運動不足です。私達が滞在した Kuching という都市は、電車といった公共交通機関は無く、車移動がメインでした。マレーシアの車は日本ほど高価ではないようで、1家に1台ではなく、1人が1台持つのが普通であるそうです。私達が滞在した時期はちょうど雨季から乾季に移った時期であつたらしく、雨の降らない日が続き、大阪の真夏のような暑さが続きました。その暑さもあり、街中に私達以外の歩行者をみることはなかなかありませんでした。その代わり車の数は非常に多く、仕事始めと仕事終わりの時間では一般道でも長い渋滞が常にみられる程の数でした。公園や市民プール、ジムで運動されている大人もしばしば見られましたが、私はこの移動に体を動かさないことが一因であるように思いました。

3つ目は宗教です。私達が滞在した4月の3週目までが、イスラム教徒のラマダーンの期間でした。その期間中、イスラム教徒は日が昇る前に起床し、朝食をとり、日が出ている日中は食べることも飲むことも禁じられており、日が沈んだ後に夕食をとることができます。日中は飲食が禁じられている一方でその他の仕事などの日常生活は他宗教の人と同様に過ごさねばならず、寝てエネルギーの消費を抑えることなどをしてはならないそうです。私は1、2回、サラワク大学のイスラム教徒の医学生に夜中にバナナのフライなどをいただく機会がありました。その料理は非常に美味しく、すぐに食べてしまったのですが、基礎疾患を持った人達が、同様に夜中に甘い物やカロリーの高い物をたくさん吃るのがは体に悪いと思いました。私達が滞在した4月の最終週は、ラマダーンの時期が終わり、ハリーライヤーという、イスラム教徒のお祝いの期間でした。国民の祝日が3日ほど続きました。このハリーライヤーの期間は地域によって長さが異なるのですが、サラワク州においては1ヶ月間続くようでした。その期間、さまざまな家庭が親戚や友人を招き入れ、食事を振る舞い、花火をするそうです。私達は、自分達が参加した医学部3年の講義に参加していた1人の医学生がそのイベントに招いてくださったので、その方の家に伺いました。そこでさまざまな方々と交流することができ、非常に刺激的で楽しい時間を過ごすことができました。その医学生の母が私達にさまざまな料理とお菓子を振る舞ってくださいました。

さり、私達は満腹の状態で宿に帰りました。その家では非常に多くの種類のお菓子が並んでいました。私達が驚いていると、その医学生が、この期間はどの家も同じくらいお菓子が振る舞われており、普通であると言っていました。祝日の次の日に実習では、病棟でたくさんのDKAの患者、肥満患者をみました。スペシャリストがおっしゃっていたのは、ハリーライナーの後は毎年糖尿病患者、肥満患者がいつにもまして非常に多いそうです。前日にそのイベントを経験したので、深く納得することができました。宗教が生活習慣病に与える影響の大きさを実感しました。また、実習中に糖尿病患者に対する経口血糖降下薬のラマダーン期間中の処方の調整を学びました。宗教に応じて提供する医療が変化することが非常に興味深かったです。

私達は日本ではなかなかみられない疾患を学ぶこともできました。マラリア、デング熱の患者が多いみたいですが、今回の実習では私達は見学することができませんでした。しかし、私達は類鼻疽の患者を何例か見学することができました。類鼻疽は皮膚の傷が土壌などに汚染されて感染し発症する感染症で、東南アジアやその他一部の熱帯地域でしかみられない感染症です。治療は長期の抗菌薬投与を必要とするらしく、スペシャリスト達が抗菌薬の量を調整している姿を見学しました。また、狂犬病患者の緊急症例があったとスペシャリストからききました。マレーシアでは、野犬が多くみられ、私達が宿から病院へ徒歩で行く際にも、毎日何頭かの野犬を見ました。野犬が私達に迫ってくることはなかったのですが、日本では野犬を見ることがないため、非常に恐ろしく感じていました。スペシャリスト達からも、野犬を触らないよう注意を受けました。狂犬病を発症した患者の症状や対応をスペシャリストから聞き、非常に印象に残りました。

私達は、サラワク大学医学部3年の講義にも参加しました。Bed Side Teachingという講義では、医学部3年の学生が身体診察の実習を行っていました。彼らは7分という制限時間内で実際の患者の身体診察を行い、その後先生に3分間、自らが行った診察に基づく鑑別疾患を挙げて、その後先生からフィードバックをもらう、という流れでした。私達が驚いたのは、彼らが2、3ヶ国語を流暢に使いこなすことです。講義は英語で行われ、テキストも全て英語で書かれています。その一方で患者はマレー語しか話せなかつたり中国語しか話せなかつたりで、英語が通じない患者も多く、病棟、外来見学でも、医師間の会話は英語で、患者と医師の会話は別の言語で行われるという状況が多々見られました。私達は、医学生の段階で2、3ヶ国語を習得し、言語を度々切り替えていた姿に感銘をお受けました。そして、なんでも日本語でなんとかなる日本の医療との違いに驚きました。Bed Side Teaching含め、どの講義も内容が日本の講義と比較して実践的である印象でした。また、試験も筆記試験のみならず、身体診察試験も度々行われているようでした。マレーシアの医学生のレベルの高さ、求められる勉強量の多さを実感し、マレーシアの医学生が勤勉である理由にも納得しました。

[今後の抱負]

この実習で痛感したのは、私達が関わった医学生、医師、その他医療従事者達が全て私達に寛容であり、非常に親切に接してくださったことでした。彼らはさまざまな他の宗教の厳しい規律や価値観を理解し受け入れ、協力して医療を施していることが一因であることに感じました。私もこれからグローバル化する社会の中でさまざまな価値観を持った人とのチーム医療を提供する中で、文化や宗教のバックグラウンドが異なる人々、価値観が異なる人々の考えを受け入れ、協力して医療を施せるような医師になりたいと思いました。

また、英語を習得するだけで世界中の医師とコミュニケーションをとることができることを実感しました。これから英語も勉強し、英語で国外の医師とも積極的にコミュニケーションをとることのできる医師になりたいと思いました。

[謝辞]

最後に、海外実習の手続きの際に大変お世話になった医学科教育センターの方々、推薦状を書いてくださった熊ノ郷淳医学部長、サラワク大学の留学担当の方々、サラワク大学医学部生の方々、Hospital UMUM Sarawak で大変お世話になった General Medicine のスペシャリストの方々、そしてこのような非常に貴重な海外実習の機会を与えてくださった岸本忠三大阪大学名誉教授に心より御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6 年	学籍番号 : *****	氏名 : N・T
--------	-----	--------------	----------

渡航先国 : マレーシア
受入機関名 : サラワク大学
渡航先機関での受入期間 : 令和 5 年 4 月 3 日 ~ 令和 5 年 4 月 28 日 (26 日間)

・目的

マレーシアのサワラク州という発展途上の地域でどのような医療が行われているのかを学び、日本の医療との相違点について考察する。また、マレーシアはマレー系、中国系、インド系、少数民族といった多民族によって構成されていることから、そのような特殊な環境下での医学教育や医療システムの在り方について学ぶ。

・実習内容

4週間の実習中、主にサラワク大学医学部キャンパスの隣にある Hospital Umum Sarawak の General Medicine (総合内科) で、先生方の指導のもと実習を行った。また、現地の3年生と一緒に、消化器疾患に関する授業に参加したり、病院での Bedside teaching と呼ばれる実践的な診察を伴う授業に参加したりもした。

日付	活動場所	内容
4/3	サラワク大学 City campus	オリエンテーション
4/4-6	Hospital Umum Sarawak	総合内科医の先生による lecture/外来見学
4/7-9	祝日・休日	
4/10	Hospital Umum Sarawak	呼吸器の Bedside Teaching
4/11,13-14	Hospital Umum Sarawak	General Medicine での病棟見学/外来見学
4/12	サワラク大学 Samarahan	消化器疾患に関する講義
4/15-16	休日	
4/17-20	Hospital Umum Sarawak	General Medicine での病棟見学/Lecture
4/21-24	祝日・休日	
4/25-26	Hospital Umum Sarawak	General Medicine での病棟見学
4/27	Hospital Umum Sarawak	Lecture/まとめ
4/28	帰国準備	

・成果・感想

General Medicine での実習

今回の4週間の実習のうち、大部分は General Medicine での病棟見学や外来見学であった。病棟見学では、総合内科医の先生方2-3人が患者さんのもとに行き、診察を行った上で患者さんの治療方針を決めていく様子を見学した。現地の医者同士は主に英語を話していたが、患者さんと先生間の会話では、マレー語や中国語など英語以外の言語が用いられていることも多く、診察の内容全てを理解することはできなかったが、診察後に先生方に英語で簡単な内容を教えていただき、患者さんの状況を理解することができた。Hospital Umum Sarawak は、サワラク州で最も病床数の多い公立病院であるらしく、患者さんの中にはインドネシアから医療を受けに来ている人もおり、病棟は常に満室状態であった。そのため、医師1人あたりの患者さんの数も多く、大変忙しそうであった。

マレーシアの病院の多くは、日本のように診察科ごとに細かく病棟が分かれているのではなく、女性病棟・男性病棟といったような大まかなくくりでしか分かれていなかったため、同じ病棟に様々な疾患の患者さんがいた。実際、見学した病棟には、糖尿病患者や腎不全患者、脳梗塞患者、消化器疾患患者、呼吸器疾患患者と様々であった。そのため、医者についても、様々な疾患を幅広く見ることが出来る総合内科医が重宝されているように感じた。現地の先生から話を聞いたところ、マレーシアの医師は、研修医の2年が終わった後の約7-8年間、総合内科医として働いた後に、それぞれの診察科の専門医を取得するという流れであるらしく、日本とは全く異なる医療システムであることが分かった。また、マレーシアの公立病院では患者負担が少ないことも特徴にあげられる。外来では、一律1RM(約30円)のみであり、政府の予算の多くが医療費に回されているようだ。しかし、病院の設備などが全て政府によって厳しく管理されているため、病院内のCTやMRIの数に限りがあるそうだ。さらに、HbA1cなどの試薬も高価であり、医者が患者の疾患を考察するにあたって、検査に頼ることができない状況も多々あるように感じ、日本の医療が恵まれていることを実感した。また、マレーシアでは医療の設備に限りがある分、身体診察や問診に重きを置くことも肌で感じることができ、大変有意義な経験ができた。

さらにイスラム教の患者を中心に、宗教的な理由で豚を使用した薬剤(ヘパリンやトロンビン製剤・インスリンなど)を利用できない場合や糖尿病のインスリン管理において断食を考慮する必要がある場合など、日本ではあまり見られない状況に医師が苦労する姿も見ることができて、多民族社会の一部を実感することができた。

今回の General Medicine での実習を通して様々な分野の疾患を鑑別に入れながら、身体診察や問診を行っていくことの重要性を感じた。また、日本ではあまり見られない類鼻疽や狂犬病・腸チフスなどの患者さんを見ることができたのも大変印象に残った。

現地の学生との関わり

サワラク大学医学部の3年生に混じって、消化器疾患に関する講義と病院で行われるBedside Teachingにそれぞれ1回ずつ参加した。どちらの講義も、学生の主体性が重視されている点が大変印象に残った。消化器疾患に関する講義では、2時間の講義のうち最初の1時間ほど、学生によるスライド発表が行われ、その後先生による説明が加えられるという形式であった。学生が作成したスライドは、疾患に関する内容が分かりやすくまとめられており、さらに身体所見や画像所見・鑑別疾患などより実践的な内容も含まれており、大変驚いた。また、Bedside Teachingでは、生徒が患者さんの診察を最初から最後まで行った上で、先生や他の生徒からのフィードバックを受けるという形であり、日本の臨床実習よりも患者さんと接する機会が多く、より実践的な経験を積むことが出来るという印象を受けた。生徒一人一人の勉強に対する意識も高く、大変刺激を受けた。

約30日間滞在した大学の寮では、医学部の4・5回生と生活をともにし、様々な民族出身の学生と交流することができた。彼らは自分たちをいつも笑顔で心優しく受け入れてくれて、大変感銘を受けた。一緒に生活していく中で、彼らは自分たちの宗教や民族、文化を非常に大切にしていると感じた。自分自身を大事にしているからこそ、他者に対して同じように思いやりを持つことができ、多民族国家でも上手く溶け込むことができるのではないかと考えた。彼らと仲良くなることができたのはかけがえのない経験となった。

・今後の抱負

今回の実習では、医学英語に触れる機会が多く、大変貴重な経験となった。日本に帰国後も継続的に英語学習に取り組み、将来的に海外の医師と上手く関係を築けるようになりたい。また、マレーシアの学生の勉学に対する積極性を見習い、5月からの臨床実習では、より積極的に参加し、卒業までにある程度の臨床能力を身に着けられるよう努力したい。

また、充実しているとはいえない医療設備の中で、地域に根差した医療を提供するために必死で働く医師の姿を見て、大変刺激を受けた。多くの患者さんから信頼されていることを目の当たりにし、自分も将来同じようになりたいと強く感じた。

今回様々な文化背景を持つ人々と交流することができたのは、とても有意義な経験となった。将来医師になった時、様々な人と接する機会が増えると思うが、他者を理解しようとする謙虚な姿勢を忘れずにいたい。

今後も、海外に留学する機会があれば積極的に利用していきたいと思う。

・謝辞

今回の海外実習に際して、ご支援いただいた岸本忠三先生、医学科教育センターの渡部先生、河盛先生、小池さん、UNIMASのDr. Wo、Dr. Ken、Dr. Alex、その他お世話になつたすべての方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。